

八木静子



小説秩父事件

伝蔵

困民党会計長

まつやま書房

『伝蔵』 目次

第一章	死刑囚	3
第二章	生糸の道は横浜へ	37
第三章	天下の政事を直し、人民を自由ならしめん	95
第四章	釧路集治監	189
第五章	野付牛を目指して	217
あとがき		274
秩父事件・井上伝蔵関係年表		276
参考文献		279



北海道図

地理院地図（白地図・淡色地図）を参考に作成

第一章 死刑囚



「生きる」

全身が震えるような寒さのなかで、船べりから空を見上げた。海鳥の鳴き声が響く。その声は伝蔵には生きると聞こえた。

一八八七年（明治二十）の秋、井上伝蔵は仙台から北海道の室蘭に渡った。仲間を探の旅だった。

夜明けの白いもやの向こうにぼんやりと赤いたき火がいくつか見える。背後には切り立った断崖が入り江を囲むようにうっすらと浮かび上がってきた。

当時の室蘭は多くの屯田兵や開拓者とその家族でにぎわっていた。伝蔵はその横をすり抜けるように歩いて行った。その時、誰かにうしろから見られているような感じを受けた。すぐに振り向くと、母親に背負われた子どもと眼が合った。伝蔵はほっとした。

伝蔵には絶えず何者かに追われているような切迫した緊張感があった。

室蘭の町をよく知っているかのように、伝蔵は再びゆっくりと歩き始めた。しばらく大通りを歩いていたが立ちどまり、また振りむいた。だれも伝蔵の後を追ってくるものはい

ない。伝蔵は理髪店の看板を路地裏に見つけると、わざとゆっくり戸口に近づき、さつと中に入った。

四、五人の客が将棋に夢中になっていた。一人の男が伝蔵の顔をちらりと見たが、すぐに盤の駒に眼をもどした。伝蔵は胸をなでおろした。

しばらくして伝蔵の番がきた。疲れが見える青白い顔に、無精ひげが生えた伝蔵が鏡に映っている。

さつそくひげを剃ってもらいながら、伝蔵はそれとなく本多新のことをたずねた。

「ああ、知っていますよ。この辺りでは世話好きで評判のお人だ」という返事がかえってきた。

本多新は、自由党の創立大会に室蘭から、京橋鎗屋町（銀座五丁目）の寧静館（自由党の本部がある建物）に参加するほどの熱心さだった。伝蔵は本部でたびたび本多の名を耳にしていた。

伝蔵は店主の話から、本多新が丸本創成館という旅館の主であることを突き止めた。

創成館は、二棟続きの大きな旅館だった。室蘭港が一望できる石段を登って黒塗りの玄関を開けた。店の中にはすでにストープがたいてあり、暖かい。伝蔵は緊張で身が固くなった。

案内を乞うと、

「いま行きます、少し待ってください」

大きな、がらがら声が聞こえてきた。

伝蔵は凍える手をストーブにかざしながら、旅館の主が顔を出してくれるのを待った。

「えろう、お待たせしまして」

伝蔵が振り向くと、日に焼けた浅黒い顔に、いくたの風雪のなかを歩いてきたという風格を備えた人が立っていた。歳は三十四歳の伝蔵とあまり違わないように見えた。

「どんなご用件でしょうか」

男は丁寧な口調で訊ねた。

「伊藤房次郎と申すものです」

伝蔵はここに来るまでに考え抜いてきた偽名を使った。遠縁にあたる伊藤の姓と、伝蔵がよく通った銀座の餅菓子屋の店主の名を借りた。

「人を探しています。仙台で知り合った方から、本多さんの名前を伺い、訪ねてきました」
伝蔵は用件を率直に話した。

「そうでしたか。私でお役に立つかどうか、わかりませんが」

本多は小僧にお茶をいいつけた。

「なにしろ、多くの方が室蘭にやってきましたんで、お名前を伺ってもわかるかどうか」
本多は申し訳なさそうに言った。

「どのようなお方なんでしょうか」

探るような眼を伝蔵に向けた。

小僧がお茶を持つてくると、本多は伝蔵に上がりぶちに座るように勧めた。

お茶はよい香りがした。伝蔵は古まが入れてくれる茶を思い出した。

「それが、」

伝蔵は言いよじんだ。

「なあに、かまいませんよ。ちつとや、そつとでは驚きませんから」

御一新の急激な変化を生き抜いてきた人だ。一見商売上手な宿屋の主人になりきっているが、世の中の古いしきたりにとらわれず、自分なりの考えを奥に秘めている人だと伝蔵は感じた。

「仲間を探しているんです。集治監（現在の刑務所にあたる）に送られたらしいのです」

伝蔵は思い切って言った。

本多はしばらく黙って、しげしげと伝蔵の顔を見た。

「伊藤さん、ご出身は上州か武州ですかい」

突然の質問に伝蔵は戸惑った。この人は何か知っているのかもしれない。伝蔵は激しい鼓動に耐えた。

「いやなあに、上州出身の知り合いがしまして、お国訛りが似ていますもんで。宮部の裏のぼるって言うんですがね」

伝蔵は宮部と聞いて、はっとした。秩父自由党员である伝蔵は、上州（群馬）自由党の中心にいた宮部襄を心から尊敬していた。伝蔵は、本多の鋭い視線を感じながらも、そ知らぬふりをした。

秩父困民党の生き残りであることを悟られてはならぬ。本多の出方によっては、すぐに逃げなければならぬ、と伝蔵は覚悟した。

「大したことではありませんなあ」と言つて、本多はそれ以上何も聞かなかった。

「ここには、三つ集治監があるんですよ。樺戸、空知、釧路です。今、樺戸の囚人たちを使って道路を作っています。石狩道路って呼ばれています。昼も夜もおびただしい数のカやブヨに襲われ、おまけに、オオカミやヒグマがでる。食べものも十分に与えられないまま、働かされているということですよ」

一八七九年（明治十二）、伊藤博文が作成した政策を実行するため、明治政府は懲役刑十二年以上の者をとじこめる集治監を北海道に建設した。囚人の多くは、明治政府のやり方に不満をもつ国事犯（政治犯）だった。

「樺戸と空知はともに石狩にあります。ここから馬車と歩きで一か月以上はかかりましようか。釧路は日勝峠を越えなければなりません。札幌に出てから南下するか、ここから、船で行くしかないでしょう」

本多は気の毒そうに言った。伝蔵はなんとかして、集治監に行くつもりだと言うと、本

多はふと思いついたように、

「旅費も大変ですよ。まず苦小牧の笠松立太を尋ねたらよいでしょう。土工をやっていますが、義侠心のある男です。春になってから、石狩にお行きなさい。知り合いがいます。よろしければ、二人とも紹介しましょう」

本多は、奥に引っ込んだ。伝蔵はぎくりとした。本多が警察に密告すれば、もはや逃げられないだろう。すべては本多の手の内にある。

——わしは、自由黨員を信じる。

伝蔵は心を決めた。

本多はしばらくして、奥から出てきた。

「これをお持ちなさい。苦小牧の笠松立太くんと、石狩の八幡神社の宮司の岡村静雄くんに見せて、相談してごらんなさい」

本多が見せた紙には、この人をよろしく頼む、と書いてあった。

「心配はいりませんよ。二人とも信頼できる人ですから」

本多は伝蔵の気持ちを理解しているような口ぶりだった。

「それにこれは旅費の一部にしてください」といって、本多は、封筒を差し出した。

「大した金額じゃありません。伊藤さんが、お目当ての人に会えることを心から願っています」

本多は、努めて何気なさそうに伝蔵を見た。瞳の中にともった優しさを伝蔵は見逃さなかつた。

本多は手書きの地図を広げ、指でたどった。

「房次郎さん、札幌道をお行きなさい。白老村を過ぎ、海沿いの道を進んでいくと苫小牧村に着きます。ここで冬を越したほうがいいでしょうなあ。北海道の冬は本州と比べものになりません。体の芯まで凍ってしまうようですから。春になってから、植苗の村を過ぎ北へ行くと、千歳村、島松村と続く。豊平川を渡ると、札幌の町に着きます。そこから川を下り、石狩川の本流に入って、川を下っていけば石狩の町に着きます」

本多はその地図を再び丁寧に折ると伝蔵に渡した。伝蔵は本多の好意を心の底からありがたいと思った。

「どうも無事で」

本多は伝蔵に向かって丁寧に頭をさげた。伝蔵もまた深々と頭を垂れた。しばらくして、伝蔵がふり返ると、本多は店の前で伝蔵をずっと見送っていた。

参考文献

秩父事件関係・研究図書

- 『秩父織物変遷史』 埼玉県立図書館復刻叢書十八 埼玉県秩父工業試験場秩父織物変遷史編集委員会編
一九六〇年
- 『井上伝蔵』北栄著 非売品 一九七一年
- 『横浜開港五十年史下巻 復刻版』 横浜商工会議所編 名著出版 一九七三年
- 『自由自治元年 秩父事件資料・論文と解説』 井出孫六編著 現代史出版会 一九七五年
- 『峠の廢道 明治十七年秩父農民戦争覚書』 井出孫六著 二月社 一九七五年
- 『自由党激化事件と小池勇』 村上貢編著 風媒社 一九七六年
- 『秩父困民党に生きた人びと』 中沢市朗編 現代史出版会 徳間書店 一九七七年
- 『秩父嵐 秩父事件と井上伝蔵』小池喜孝 徳間書房 一九七四年
- 『鎖塚 自由民権と囚人労働の記録』小池喜孝著 現代史出版会・徳間書店（発売）一九八一年
- 『秩父困民軍會計長 井上伝蔵』新井佐次郎著 新人物往来社 一九八一年
- 『秩父事件小説集』新井佐次郎著 まつやま書房 一九八一年
- 『自由民権革命の研究』江村栄一著 法政大学出版社 一九八四年
- 『親子で読む 秩父困民党』石井重雄著 非売品 一九八五年
- 『裁かれる日々 ― 秩父事件と明治の裁判』春田国男著 日本評論社 一九八五年
- 『秩父地方郷土史雑考』垣原謙一著 秩父郷土研究会 小石川書房 一九九三年
- 『ガイドブック 秩父事件』秩父事件研究顕彰協議会編 新日本出版社 一九九九年
- 『井上伝蔵 秩父事件と俳句』中嶋幸三 邑書林 二〇〇〇年
- 『田中千弥日記』解説田中千代日記抄 秩父事件雑録 壬申帖 癸酉帖 辛未帖 吉田町教育委員会 第三版 二〇〇二年
- 『秩父事件 圧制ヲ変ジテ自由ノ世界ヲ』秩父事件研究顕彰協議会編 新日本出版社 第三版 二〇〇四年
- 『井上伝蔵とその時代』中嶋幸三 埼玉新聞社 二〇〇四年
- 『秩父困民党群像 新装版』井出孫六 新人物往来社 二〇〇五年

- 『再訂版 詳説日本史資料集』山川出版社二〇〇八年
- 『自由民権運動史への招待』安住邦夫著 吉田書店 二〇一二年
- 『自由民権(激化)の時代』運朝邦夫著 高島千代・田嶋公司編著 日本経済評論社 二〇一四年
- 『明治の戦争と横浜』伝わる情報、支える地域』横浜開港資料館発行 二〇一八年
- 『西南戦争民衆の記』〈大義と破壊〉長野浩典著 弦書房 二〇一八年発行
- 『大月市史』通史編 大月市史編纂委員会 大月市史編纂室 校倉書房 一九七八年
- 『天保騒動記』青木美智雄 三省堂 一九七九年
- 『真説甲州一揆犬目の兵助逃亡記』佐藤健一著 時事通信社 一九九三年
- 『名粟の歴史 上・下』飯能市名栗村史編集委員会編 飯能市教育委員会 二〇一〇年
- 『銀座物語』煉瓦街を探訪する』野口孝一著 中公新書 一九九七年
- 『芸者と遊び』田中優子著 角川ソフィア文庫 二〇一六年
- 『明治ニュース事典』明治ニュース事典編纂委員会 毎日コミュニケーションズ出版部 一九八三年

北海道関係研究書(事典等を含む)

- 『北海道札幌師範学校五十年史』北海道札幌師範学校編 北海道師範學 一九三六年
- 『開拓に尽くした人びと8』文化の黎明・下』北海道総務部文書課 一九六八年
- 『北海道開拓功労者関係資料集録 下巻』北海道総務部行政資料室 一九七二年
- 『北海道百年史』円山百年史編纂委員会 一九七七年
- 『新聞に見る北海道の明治』大正 一報道と論説の功罪』佐藤忠雄著 北海道新聞社 一九八〇年
- 『写真と文 北の獅子たち』自由民権と北海道』写真・佐藤毅 文・小池喜孝 北海道新聞社 一九八一年
- 『北海道新聞四十年史(非売品)』北海道新聞社 一九八三年
- 『石狩百話 風が鳴る 河は流れる』石狩市 鈴木トミエ編 石狩市 一九八九年
- 『さつぼろ文庫六十六 札幌人名事典』札幌市教育委員会 一九九三年
- 『日本農業統計調査史』及川章夫著 財団法人農林統計協会 一九九三年
- 『町内資料に読む 石狩町女性史年表』駒井秀子編 石狩市郷土史研究会 二〇〇二年

- 『日本の近代化と北海道』永井秀夫著 北海道大学出版会 二〇〇六年
 『いしかり暦』二十二号 「石狩尚古社社員 井上伝蔵と土方常吉、中島源五郎の俳句」鈴木トミ工著
 二〇〇九年
 『北海道における徴兵制の展開…「国民皆兵」の虚実』阿部剛著
 『年報新人文学6』北海学園学術情報リポジトリ 二〇〇九年
 『新聞に見る石狩・厚田・浜益 歴史年表 明治二十六年～二十八年』編・著 鈴木トミ工 石狩市地方史研究会 二〇一二年
 『新聞に見る石狩・厚田・浜益 歴史年表 明治三十四年』編・著 鈴木トミ工 石狩市地方史研究会 二〇一二年
 『帝国陸軍師団変遷史』藤井非三四著 国書刊行会 二〇一八年
 『北見ブックレットNo.15伊藤房次郎は井上伝蔵』田丸誠著 オホーツク文化協会編集委員会 二〇一二年
 『鳥取県史 近代第一巻総説篇』鳥取県編集 一九六九年
 『石狩八幡神社史』石狩八幡神社 二〇〇八年

論文・資料秩父事件関係

- 『西秩父における町形成と商業の展開』歴史地理学調査報告 第五号 岡村治著・川崎俊郎著 一九九一年
 『秩父絹の生産と流通に関する一考察』歴史地理学調査報告 第七号 平野哲也著 一九九六年
 『開港のひろば』新聞万華鏡 ④～⑯ 横浜開港資料館発行 二〇〇一年～二〇〇五年
 『開港のひろば』七号、十六号、二十四号、三十二号、三十三号、七十二号、八十二号、八十七号 横浜開港資料館発行 一九八四年～二〇〇四年
 『自由民権の再発見 第六章』編著安在郁夫・田崎公司 日本経済評論社 二〇〇六年
 ・「激化期「自由党」試論―群馬・秩父事件における「偽自由黨」と「自由党」―」高島千代著
 『自由民権(激化)の時代―運動・地域・語り』高島千代・田崎公司 編著 日本経済評論社 二〇一四年
 ・「第二章 減租請願運動と自由党・激化事件」高島千代著
 ・「第三章 青年民権運動と激化」横山真一著
 ・「コラム1 杉田定一」飯塚一幸著

- ・「第六章加波山事件 ―富松正安と地域の視点を中心に― 飯塚彬著
- ・「第七章秩父事件に関する研究ノート―田代栄助の尋問調書の分析から見える秩父事件― 黒沢正則著
- ・「秩父人が迎えた明治維新 ―『木公堂日記』を読む― 鈴木義治著 二〇一六年
- 『埼玉の歴史教育』二八号(二〇〇四年)を一部修正・加筆
- ・「なぜ、栄助と伝蔵は皆野本陣を離脱したのか」篠田健一著 二〇二〇年
- 『私たちの秩父事件』五十嵐睦子編著 新人物往来社 一九八四年
- ・「井上伝蔵の妻と娘」石原芳枝著
- ・「秩父 二〇四号ほか」秩父事件研究顕彰協議会 会報

北海道関係

- 「石狩市内の戦争に関する石碑、遺構」『いしかり暦』二十九号 工藤義衛著 二〇一六年
- 「北海道と自由民権運動」樫田精司著 『歴史地理教育』三三四号 二〇〇七年
- 「北海道の自由民権運動」永井秀夫著 『歴史評論』四一五号 一九八〇年
- 『ヌブンケン』北見市・市史編さんニュース四六号～五三号 八三号～八七号 一四一号～一四五号
二四五号 二〇〇一年～二〇一三年
- ・「座談会 北見の昔の今を語る ―北見の思い出―」
- 『屯田兵 家族のみ制度と生活』抜粹 札幌中央放送 局放送部編集出版一九六八年
- 「大赦赦免後の井上傳蔵―石狩町の名士伊藤房次郎としての二〇年間― 田中實著 北海道史研究協議会『会報』
八一号 二〇〇八年

史料

- 『秩父事件史料 第一巻』(全六巻) 小野文雄編 埼玉新聞社出版部 一九七〇年
- 『秩父事件史料集成』井上幸治一ほか編集 二玄社 一九八四～一九八九年
- 『北海道庁勸業年報 第一一七、一五五～一五九 (明治十九年―二十八年)』

『大日本帝国憲法』
『刑法（明治十三年太政官布告第三十六号）』
『北海道庁布令全集 明治二十年一月～六月』 国会図書館デジタルコレクション
インターネット送信

新聞

『朝野新聞』『横浜毎日新聞』『東京横浜毎日新聞』『東京朝日新聞』『郵便報知新聞』
『改進黨新聞』『北海道毎日新聞』

文学作品

『横浜富貴楼 お倉』 鳥居民 挿画小串世喜 草思社 一九九七年
『新装版 赤い人』 吉村昭 講談社文庫 二〇一二年
『馬追原野』 辻村もと子 北書房 一九七二年
『石狩川 上・下』 本庄陸男 新日本文庫 一九七八年
『趣味の遺伝』 夏目漱石全集？ ちくま文庫 一九八七年
『暗殺者たち』 黒川創 新潮社 二〇一三年
『聖職の碑』 新田次郎 「野付牛の老尼」「犬櫓使いの神様」 昭和五十七年 新潮社
『陽が昇るとき』 木々康子 筑摩書房 一九八四年
『最強師団の宿命 昭和史の大河を往く 5』 保坂正康 中公文庫 二〇一四年
『たかかいの人 田中正造』 大石 真 著 株式会社フレイベル館 二〇〇七年
『囚人道路』 安部襄二 講談社 一九九三年
『秩父事件小説集』 新井佐次郎 新日本文学 一九七七年七号
『三浦綾子小説選集 4 ひつじが丘 泥流地帯』 三浦綾子 主婦の友社 平成十三年
『歴史紀行 峠を歩く』 井出孫六 著 ちくま文庫 一九七九年
『長崎源之助全集 6 赤いくつ 第四話 鉄道開通』 長崎源之助 偕成社 一九八七年

『幻歌行 秩父困民党 島崎嘉四郎の生涯』春田国男 あゆみ出版 一九八四年
『山県有朋 幕末・維新の群像第九卷』半藤一利著 P H P 研究所 一九九〇年
『象徴の設計』松本清張著 文芸春秋一九六二年
『秩父困民党』西野達吉 講談社 昭和四十七年
『日本歴史物語』8 神話と伝説』林基編 河出書房 一九五七年
・「井上伝蔵伝説」中澤市朗著

映像資料

『草の乱』神山征二郎監督 映画『草の乱』製作実行委員会
二〇〇四年度文部科学省選定作品

お世話になった方々（敬称略）

俳人 中嶋幸三（俳号・鬼谷）
秩父事件研究顕彰協議会 篠田健一・高島千代・吉瀬 総・鈴木義治 他
埼玉県 元中学校教員 中田宗紀
埼玉県 高田哲郎
埼玉県 竹内勝利・出浦定市・齊藤いく江・寫田栄一・金剛院
日本児童文学者協会 真鍋和子
週刊金曜日 社長 植村隆
九条の会 事務局長 小森陽一
横浜開港資料館 館長 西川武臣
私設資料館 尚古社 館主 中島勝久
石狩市 若林真紀子
石狩市教育委員会 生涯学修部文化財課 課長 風の資料館 工藤義衛

石狩八幡神社 花田和彦
石狩郷土史研究会 釣本峰雄
石狩市内 キーワード印刷所
北見市役所 『新北見市史』編纂室 主幹斎藤幸善及び編集委員 田丸誠
北見市 佐藤毅
NPOピアソン会理事 伊藤悟

お世話になった図書館

石狩市民図書館
室蘭図書館
北見中央図書館
札幌公文書館
横浜市中央図書館
横浜開港資料館
国会図書館 新聞資料室他